

昭和55年度  
宝満山地区県営公害防除特別土地改良事業に伴う  
**増福寺古墳群発掘調査報告書**

昭和56年3月

八雲村教育委員会

## はじめに

昭和55年5月から、農林事務所の事業として、「宝満山地区県営公害防除特別土地改良事業」が実施されることになりました。そしてその事業の一環として、増福寺丘陵の南端を探土地とするよう計画されました。

八雲村教育委員会は、農林事務所の依頼によって、同地の埋蔵文化財の調査を致しました。

増福寺丘陵は、西から土井古墳群、増福寺古墳群、増福寺裏山古墳群と約40基に近い古墳が確認されており、更に東南に四歩市古墳群、同横穴群、高丸古墳群と続いて八雲村古墳分布の中核をなしている所であります。

従って昭和55年5月より開始しました調査は、東森市良先生の指導を頂きながら約半年を費して慎重に実施致しました。

本調査は、八雲村教育委員会の宮本徳昭調査員を中心として、多数の村民の方々の熱心なご協力を頂きながら、古墳四基の発掘を実施いたしました。

本調査の過程で、鉄製の劍2、および多数の鉄鏃や土器が発見され、貴重な研究資料を得ることができました。

八雲村教育委員会では、先に、勝負谷古墳、高野2号墳の調査報告書を作成し、その内容を明らかにして参りましたが、この度それに統いて、この報告書を作成いたしました。

調査を重ねることによって、本村の往時の状況が漸時明らかになって参ることは、まことに喜ばしいことではありますが、貴重な文化遺産が消えていくことに関しましては、誠に心淋しいものを覚えます。

本調査を実施するに当たりまして、東森先生のご指導はもとより、県文化課から賜りましたご指導ご助言、また絶大なご協力を頂きました八雲村産業課並びに直接発掘に協力頂きました多数の村民の方々に深甚の敬意と感謝の意を表します。

昭和56年3月

八雲村教育長 小松正雄

## 例　　言

1. 本調査報告書は、「宝満山地区県営公害防除特別土地改良事業」に伴い、昭和55年5月～同年9月まで、八雲村教育委員会が受託し、調査した報告である。
2. 本調査は、八雲村文化財保護審議会委員の東森市良（県立横田高校教諭）を担当者として、八雲村教育委員会嘱託官本徳昭が島根大学学生房宗寿雄・山崎幸春の補助を得て行い、事務局は八雲村教育委員会主事三好淳が担当した。
3. 作業員及び器材については、八雲村産業課の多大なる協力を得た。
4. 遺物整理は、宮本・房宗が行った。
5. 各項目の執筆責任者は、目次に併記したが、遺構と鉄器を宮本、その他の遺物を房宗が、それぞれ担当し、結語は3者協議の上東森・房宗が執筆した。
6. 本報告書の編集は宮本が行い、実測図は各執筆責任者、トレースは主に房宗があたり、写真撮影は宮本・房宗が、三宅博士氏の協力を得て、風土記の丘資料館で行った。
7. 増福寺古墳群を「Z」と記号化し、番号は「01」のようにした。
8. 本調査は、県文化課埋蔵文化財係長勝部昭氏はじめ、職員各氏の多大なる御指導を賜った。

## 目 次

I 調査にいたった経緯とその背景（三好）	6
II 位置と環境（東森）	8
III 増福寺古墳群の概要（宮本）	10
IV 調査結果（宮本・房宗）	14
1. 1号墳	14
(1) 墓丘の調査	14
(2) 内部主体	16
(3) 遺物	16
2. 2号墳	16
(1) 墓丘の調査	16
(2) 内部主体	18
(3) 遺物	18
3. 3号墳	20
(1) 墓丘の調査	20
(2) 内部主体	22
(3) 遺物	23
4. 4号墳	30
(1) 墓丘の調査	30
(2) 内部主体	32
(3) 遺物	33
5. 5号墳	36
(1) 墓丘の調査	36
(2) 遺物	36
V 結語（東森・房宗）	38
VI 図版	43

## 挿図目次

第1図	周辺の遺跡	9
第2図	増福寺古墳群分布図	11
第3図	" 発掘全体図	13
第4図	1号墳墳丘実測図	15
第5図	" 出土須恵器実測図	16
第6図	2号墳墳丘実測図	17
第7図	" 出土土師器実測図	19
第8図	3号墳墳丘実測図	21
第9図	" 内部主体実測図	22
第10図	" 出土土師器実測図	23
第11図	" 墓輪実測図	24
第12図	" 鉄製品実測図	26
第13図	" 須恵器実測図	28
第14図	" 須恵器実測図	30
第15図	4・5号墳墳丘実測図	31
第16図	" 内部主体実測図	32
第17図	" 出土土師器実測図	33
第18図	" 出土鉄鎌実測図	34
第19図	" 出土鉄鎌実測図	35
第20図	5号墳出土土師器実測図	37
第21図	編年図	41

## 図版目次

I-1	発掘前遺跡遠景(北東より)	45
2	発掘後遺跡遠景(北東より)	45
II-1	1号墳発掘前遠景(西より)	46
2	" 発掘後遠景(西より)	46
III-1	" 主体部(南西より)	47
2	2号墳発掘前遠景(北西より)	47
IV-1	" 発掘後遠景(北東より)	48
2	" 土師器出土状況(北より)	48
V-1	3号墳発掘前遠景(北西より)	49
2	" 発掘後遠景(北西より)	49
VI-1	" 鉄劍出土状況(北より)	50
2	" 主体部鉄鎌出土状況(北より)	50
VII-1	" 主体部(北より)	51
2	" 北西隅須恵器出土状況 (北西より)	51
VIII-1	4号墳発掘前遠景(3号墳より)	52
2	" 発掘後遠景(3号墳より)	52
IX-1	" 主体部鉄鎌出土状況(北より)	53
2	" 主体部(北東より)	53
X-1	4号墳溝土師器高坏出土状況 (北西より)	54
2	5号墳溝土師器高坏出土状況 (東より)	54
XI-1	3号墳出土輪口縁部・端部	55
2	" 墓輪胸部	55
XII	2号墳出土土師器	56
XIII	2・3・5号墳出土土師器	57
XIV	鉄製品	58
XV	1・3号墳出土須恵器	59
XVI	"	60

## I 調査にいたった経緯とその背景

この調査にいたった経緯とその背景を述べると、概ね次のとおりである。

調査の発端は、公害対策事業に伴う採土予定地として選定された区域内に、埋蔵文化財が存在することからはじまる。事業主体者である松江農林事務所長から、八雲村教育委員会へ協議があったのは、昭和53年3月であった。さっそく村教育委員会は、八雲村文化財保護審議会にその扱いについて諮詢した。保護審議会からは、昭和52年村教育委員会が行なった、埋蔵文化財分布調査報告書を参考に慎重に審議された結果、『現状のまま保存すべし』との答申を得た。これを受け、村教育委員会としては現状保存という結論を出したが農林事務所担当課長による再三再四にわたる実情説明及び地元耕作者の熱心な要望等も考慮し、最終的には村教育委員会の判断により『採土もいたしかたなし』との結論を出し、保護審議会に了解を求めた。一方、農林事務所長に対しては、採土計画の変更を求め、調査を最少限度にとどめるよう要望した。その結果、7基の古墳を調査することとなった。村教育委員会は、採土計画を勘案しながら、この7基の発掘調査を次に示すとおり三次に分けて実施するよう計画した。

第1次（昭和53年度調査済・土井13号墳）1基、第二次（昭和55年度調査済）4基、第三次（昭和56年度調査予定）2基がそれである。

いつの場合でもそうであるが、この種の調査を実施する場合問題になるのは「人」と「金」と「時間及び時期」である。調査を実施する必要が生じても、専門調査員の不在、予算はない、十分な調査期間はとれないという、調査主体者は制約の中での調査に終始することが多い。今回も当初そうであった。特に調査員の確保については全く見通しがたたず、年間の調査予定を考えれば、とても教員・学生の協力だけでは対応できないことは明確である。そこで村教育委員会としては、独自で調査員を確保することを断念し、県文化課へ調査員の派遣について依頼した。文化課としては、公共事業に伴う埋蔵文化財発掘調査を多くかかえ、市町村へ調査員を派遣するだけの余裕がない中、本村に派遣していただいた事で調査は一気に前進した。これで人の問題は解決した。

次は、調査費用と時期・期間の問題である。調査費については、事前に文化課

・農林事務所・村教育委員会の三者で協議し、第一次の例に従って農林事務所で負担していただくようお願いし、費用の負担について同意が得られた。そこで、昭和55年4月7日付の見積提出依頼により文化課の指導を得ながら、また一方では農林事務所と連絡をとりながら調査費見積・調査工程を作成した。見積について、農林事務所では、当方の希望を十分くんでいただき了解を得ることができた。

調査の時期及び期間に関しては三者が更に協議し若干調整する必要も生じたが、最終的には、村教育委員会の希望がかなり入れられ感謝している。

以上で前段の事務的つめは終り、あとは契約の締結を残すのみとなった。契約についてもやはり第一次の例に従い、一部手直しはあったものの、基本的には第一次同様の様式に従った。締結は昭和55年5月10日。本調査は文化課・農林事務所の全面的協力を得て、5月12日から開始され、一ヶ月の間をおき、9月18日に終了した。

## II 位置と環境

八雲村は松江市の南部に位置し、意宇川の中・上流域を占めている。地形は入口を山でふさがれ、やがて盆地状にひろがって、かなり広い水田地帯がありここから放射状に平原、東岩坂、西岩坂、熊野と谷が入り組んでいるが、意宇川の流域に当る熊野の谷が最も深い。

八雲村の遺跡はこの中心部の平野をめぐって集中的に分布している。本遺跡群はその入口に近く、東岩坂字川向の増福寺裏山に位置する山塊の尾根に群集する古墳群の東南端の一群である。昭和52年の分布調査では、この古墳群を三つの支群に分けた。北にのびる尾根上に位置するものを土井古墳群、増福寺北側の一群を増福寺裏山古墳群、南側から南東側のものを増福寺古墳群としたのである。今回の調査の対象となつたのはこの増福寺古墳群のうち1～5号墳である。この一群の古墳はそれぞれ規模こそ大きいもので一辺12メートルと大きくはないが、その密集度においては、八雲西百塚古墳群につぐもので、群集墳としてはその数の上だけからしても注目されて良い。この古墳群の周辺は八雲村でも特に古墳が多く東出雲町へむける道路をはさんで南側には四分市古墳群があり、確認されただけでも尾根上に6基の古墳、北及び南の斜面には24基の横穴があって、横穴の数では八雲村第一である。さらに北側にそびえる標高155mの雨乞山の南麓には八雲村第一の石室を持つ雨乞山古墳がある。これは円墳と考えられる古墳で切石で作った石棺式石室を内部主体としている。またこの山の北麓尾根には昭和55年度調査された小屋谷古墳群があり規模は小さいながらも三基の古墳が確認されており、そのうちの3号墳は主体として二段掘りの土壙の中に組合せ木棺を内蔵し、四凹鏡と鉈が副葬され、近くから壺棺も出土している。また東北の村境の尾根上に分布する八雲西百塚古墳群は47基以上的小規模墳によって構成される一大古墳群で、松江市大草町の東百塚古墳群につながっている。

このような中にあって増福寺1～5号墳は時期のわかっている古墳では昭和48年に調査された同村日吉の勝負谷古墳とはほぼ時期を同じくしており、八雲村では古墳が數多く作られはじめる頃に当たっているのである。



第1図 周辺の遺跡（「八雲村の遺跡」追加）

### III 増福寺古墳群の概要

本古墳群は、南から伸びる丘陵上に位置するものであるが、現在は県道東出雲大東線により切断された県道北側丘陵南端部に位置している。県道南側の丘陵には、四分市古墳群と同横穴群が位置している。県道北側の丘陵には、先端部西側に増福寺裏山古墳群、同東側に土井古墳群と称される古墳群があり、現在確認されている古墳だけでも総数47基を数えている。本来は、この3群は同一のものとも考えてよからう（第2図）。

増福寺古墳については、既に『八雲村の遺跡』に於いて番号と位置が表示されているが、地図縮尺が小さい為に、原位置と若干の違いが見られた。そこで、古墳発掘に際し、他古墳の所有者の協力の下に、各古墳中央部に杭を打ち、それを図示し、新たに番号をつけた。以下、簡単に各古墳毎に述べていく。

1号墳から4号墳については、今回発掘対象となっているので除外する。

5号墳は、今回発掘対象区域内に周溝及び裾平坦面の一部がかかっていた。この中に、土師器高坏4点が検出された。それについては、別稿に記すので省略する。墳形はほぼ、方墳と見て誤りなかろう。この古墳は、3・4号墳間から西へ伸びる丘陵尾根の、ちょうど根元に位置しており、以下古墳が尾根上に続いている。

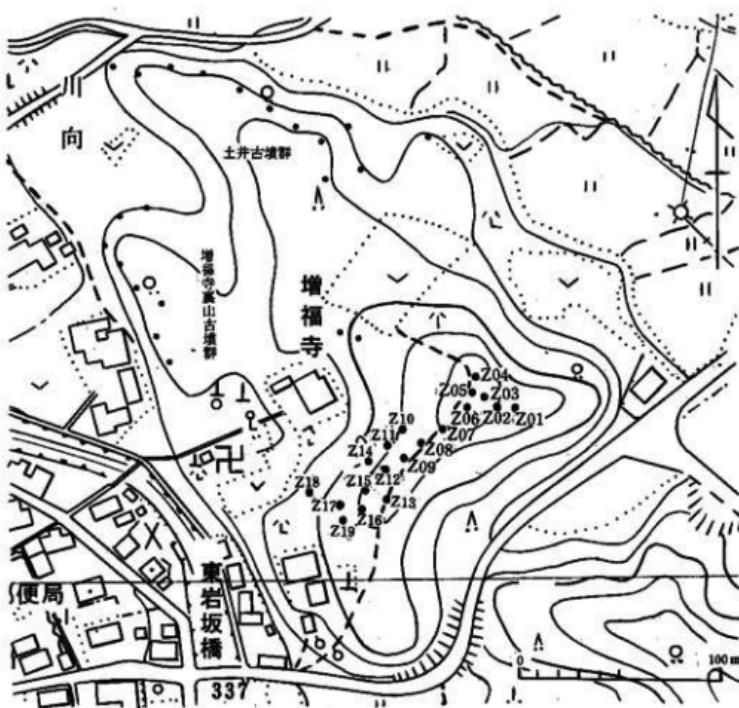
6号墳は、円墳状を呈しているが、方墳と見ても誤りなかろう。

7号墳から15号墳までは、西国八十八ヶ所と称し、各々石仏をめぐらされており、その時の破壊と共に、裾部は道となっている為に、本来の裾原形を留めていないと思われる。

この内、9号墳と14号墳は本来の裾部が残存しているが、墳形の決め手はつかめなかった。また11号墳も方墳としているが、若干の決め手を欠く所がある。他の古墳は、ほぼ原形を保っていると推定される所で、墳丘の平坦面の形状等から、方墳と解した。

16号墳から19号墳までは、西南西方面に傾斜する面に沿っている。

16号墳は一部北西部裾の平坦面が破壊をされているにすぎず、方墳と見て誤りなく、西方向から見るとかなりの比高を有している。



第2図 増福寺古墳群分布図

番号	規模 (m)	高さ (m)	地形	備考	番号	規模 (m)	高さ (m)	地形	備考
Z01	一辺 10.0	1.0	方	発掘	Z11	8.5	1.5	方?	西国八十八ヶ所
02	" 12.5	1.0	"	"	12	8.5	1.5	"	"
03	" 14.5	1.5	"	"	13	11.0 × 9.0	1.7	方	"
04	12.0 × 10.0	1.3	"	"	14	8.5	1.2	方?	"
05	一辺 8.5	1.2	"	一部発掘	15	一辺 6.5	1.7	"	"
06	6.0	1.0	方?	円墳状	16	" 8.0	1.7	"	一部破壊
07	一辺 8.5	1.4	"	西国八十八ヶ所	17	" 8.0	1.5	"	"
08	" 7.5	1.1	"	"	18	一辺 6.0	1.2	方	一部破壊
09	" 9.0	1.1	?	"	19	8.0	1.5	方?	一部残
10	" 8.0	1.5	方	"	20				

増福寺古墳群一覧表

17号墳は墳頂部に若干大きい石があるが、葺石とは考えにくく、そばの道を造成した時の石を、ここに積んだものと考えられ、本来の高さは、もっと低いものであろう。

18号墳は一部墓により、破壊されているにすぎないが、19号墳はごく一部残っている高まりから推測したもので、方墳と考えた時の一辺のみ残っているにすぎなかつた。

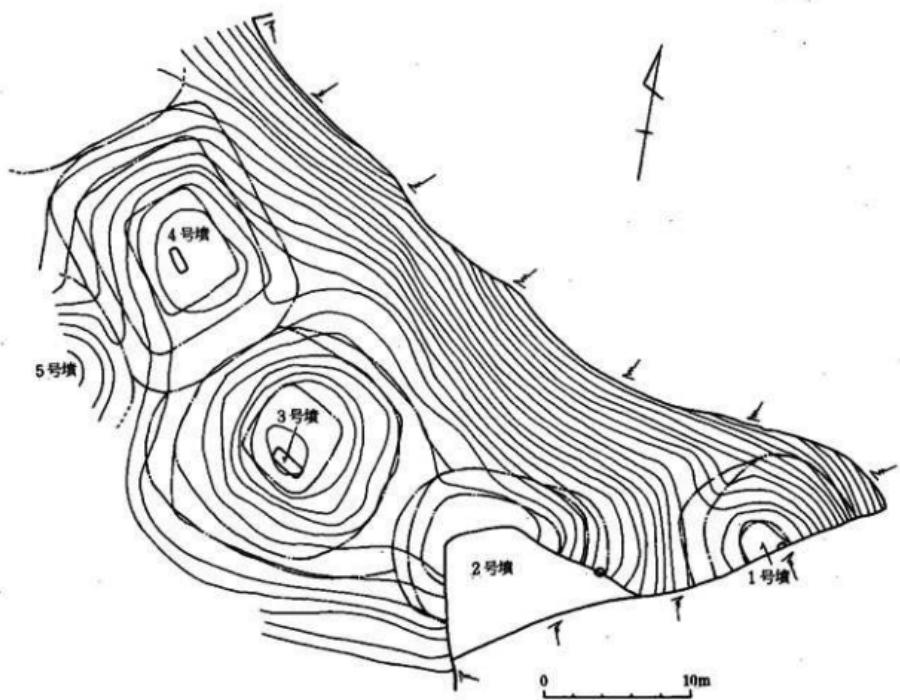
なお、13号墳東側に、低い高まりが見られたが、墳丘とする決め手がない為にここでは除外した。

4号墳北方の増福寺真裏に、2基の方墳（北西側方墳は、墳丘半分が土取りされており、旧表土の線が明瞭に観察できる。）があるが、4号墳北西側に古墳の痕跡がある（P31参照）ので、その中間にも古墳があった可能性がある（現畠地）。従って増福寺古墳群の範囲に入れるべきものであろうか。この2基は、昭和56年度事業（県農林事務所）となっており発掘計画がある。

以上不確定要素を残しながらも、ほぼ方墳と見たのは、今回発掘調査した結果を踏まえて、踏査した結果である。従って残り2グループについても、検討の余地がある（土井13号墳も発掘調査の結果、方墳であった。<sup>註1</sup>）。

また、13号墳から南への現開墾地も、地形的状況から、古墳のあった可能性もあるが、確認する余地はない。

註1 内田律雄他「速報土井13号墳の発掘」『季刊文化財』35号 1979年



第3図 増福寺古墳群発掘全体図

## IV 調査結果

増福寺古墳群については、前章で述べたところである。

ここでは、今年度調査対象となった1号墳（Z01）～5号墳（Z05）について述べていく。その中Z05はごく一部東周溝部分の調査だった（第3図）。

以下各古墳毎、墳丘・内部主体・遺物の順で説明していく事とする。

### 1. 1号墳（Z01）

#### (1) 墳丘の調査（第4図）

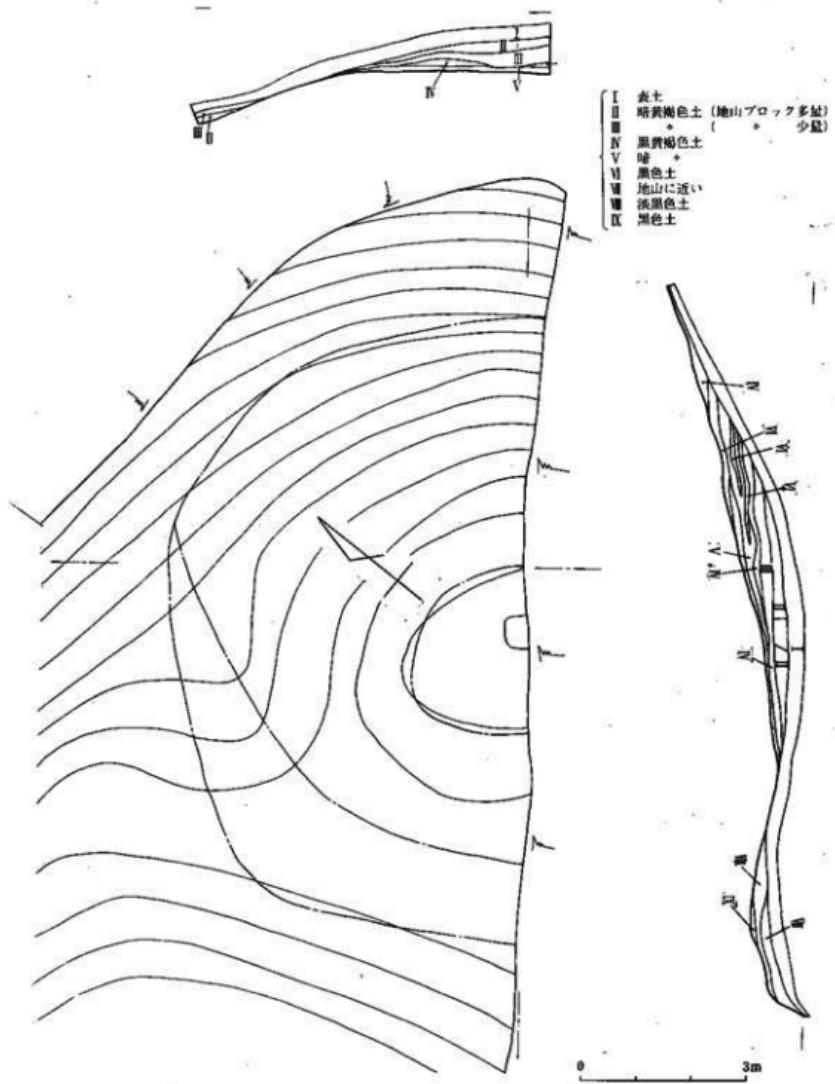
本古墳は、北西から南東へ伸びる丘陵尾根先端部、標高50～51mに位置していた。

地形測量では、半分以上が削平されていると推定されるにすぎず、墳形は不明であった。

発掘の結果、北西側2号墳との間に溝が検出され、それが直角に近い鈍角で曲がる事等から方墳と推定した。北側及び南東側は、地形的制約に因り、裾が円墳状を呈していた。削平された部分も、北西側の溝がほぼ対称的に形成され、南側及び南西側も円墳状の裾を呈していたと推定される。上面平坦部は、崖に沿って3.5m、北西へ2.5m残っていた。

残存部の築成時の規模は、崖に沿って10.0m、北西に5.5m、2号墳側高さ0.9m、先端側高さ2.3mだった。周溝幅3.0m、深さ0.9m（2号墳側削取部上面より）あり、崖より4.5mで曲がり、3.5m前後で自然地形になっていた。自然地形に制約されながらも、より良く利用している。なお、周溝の曲がった点の墳丘裾より、後述する須恵器蓋坏身がふせた状態で、押しつぶされたようになって出土した。

封土は、周溝を造った時の旧表土層を、墳丘1/4より丘陵先端側に、傾斜面を平坦にするように深い所で60cm盛り、その上に周溝の地山を深い所で50cm前後盛っている。北方向では、比較的自然地形が平坦だった為か、裾で若干旧表土をはいでいる。しかし、丘陵先端部である為に、後述する内部主体とも考え合せ、もう少し盛土があったと考えられる。



第4図 1号墳墳丘実測図

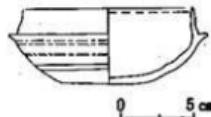
## (2) 内部主体

墳丘全体の半分以下が残存していたのにすぎず、検出した主体部は不明瞭であったが、底は土層観察でも平坦面にした堅くしまった土層上面であった事から、ほぼ誤りないと考えられる。

検出は、地表下25cmの地山の盛土面であった。検出規模は、長さ50cm・幅60cm・深さ22cmで、ほぼ垂直の素掘り土壤であった。壁面は若干不明瞭であったが、底は堅くしまっていた。残存部から推定する主軸は、N-36°Wと考えられる。

## (3) 遺物

須恵器（第5図） 1号墳では、墳丘の西端部から須恵器蓋坏の身部が1個出土している。これは盛土に接して逆さ向きに置かれたもので、上方から押しつぶされた状態を呈しており、出土状況等から見て原位置を保っていた可能性は高いと思われる。その口径は11.8cm、器高5.3cmであり、やや内傾する高いたちあがりをもっている。口唇部は退化してはいるが二段に整形されており、底部の2/3程には順回り回転によるヘラ削りが施されている。胎土、焼成ともには良好であり、灰色を呈する。若干の焼きひずみが見られ、一部には重ね焼きの跡と思われる粘土が付着している。



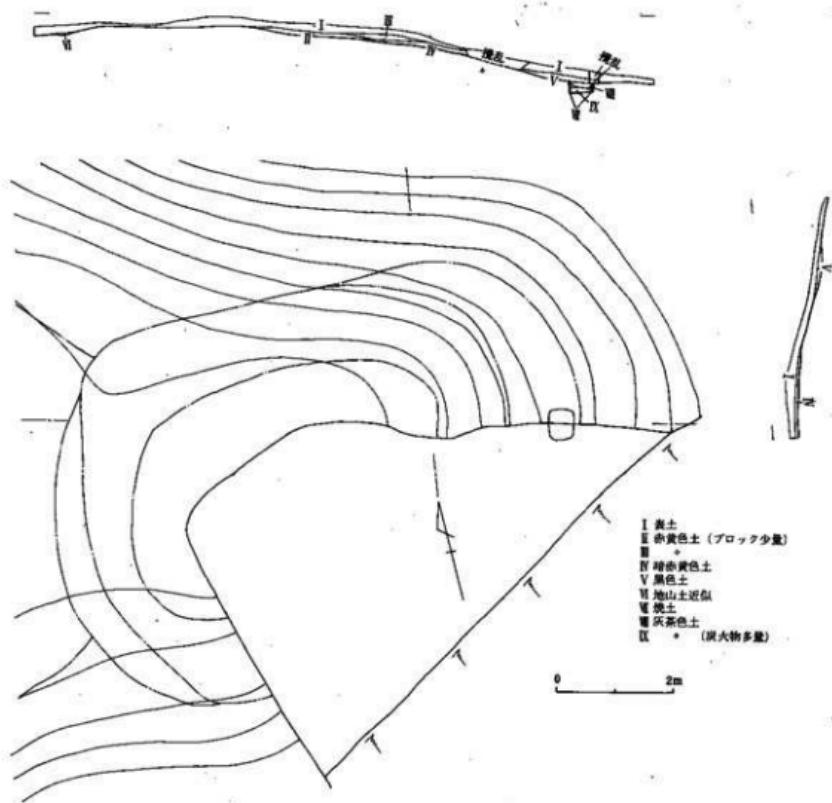
第5図 1号墳出土須恵器実測図

## 2. 2号墳 (Z02)

### (1) 墳丘の調査（第6図）

1号墳より丘陵上南面に上りかけた、標高52.5~54.0mに位置する。墳丘主要部は既に削平されて、半分以下が残っているにすぎない。地形測量の時でも墳形及びその範囲も不明瞭であった。

発掘の結果、西側3号墳との間に溝を検出し、北東側1号墳との間に地山整形に因る平坦面を検出した。3号墳側周溝は隅丸状、1号墳側の平坦面は明瞭なる鈍角のカーブが形成されており、両者が相対した所に溝が形成されている点よりして、ほぼ方墳と推定するに到った。墳丘平坦面主要部は、残っていなかった。



第6図 2号墳墳丘実測図

築成時の復元推定規模は、墳丘平坦面東西6.0m・南北5.0m、裾東西12.0m・南北10.0m、高さ3号墳側0.7m・同1号墳側1.2mとなる。

3号墳側周溝は、長さ10.0m、幅1.5m前後、深さ0.2m前後を測る。なおこの周溝が曲がる所より、地山直上に近いレベルで、後述する土師器高坏6個、同壇1個体が、それぞれ2グループに分かれ倒置した状態で検出された。

1号墳側平坦面は、現存長7.0m・幅1.5mである。なお削平された所で1基性格の不明な、一辺6.5cmの方形遺構が検出された。平坦面よりも新しく、側壁には焼土1cm前後、底隅には若干の炭が検出されている。

封土は、墳丘の西半分は旧表土を削平しているが、東半分は旧表土を残している。東半分の旧表土上に、平坦面を形成するように約30cm前後の盛土をしている。北側斜面は墳丘平坦面下まで旧表土を残し、斜面は旧表土を削ぎ、ほとんど盛土はしていないが、裾と推定される所は若干深く地山を整形し、幅40cm前後の平坦面を形成していたようである。

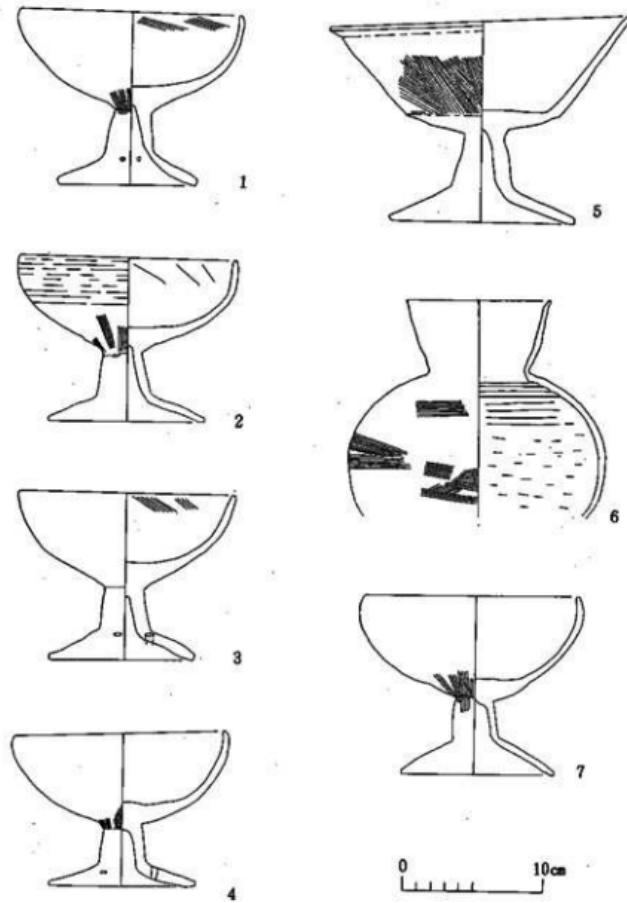
## (2) 内部主体

前述の如く、墳丘平坦面主要部が大半削平されている為、るべき主体部が検出できなかった。

## (3) 遺物

土師器（第7図） 2号墳からは土師器7個体の出土が見られた。これは墳丘西端部溝中に倒立して置かれていたもので、2つのグループ（No.1～No.3、No.4～No.7）に分かれていた。出土状態から見て原位置を留めていたことは確実である。器種別に見ると、塊形の高坏5個体、有段の高坏・壇それぞれ1個体である。

塊形の高坏（No.1～No.4、No.7）は口径14.6～15.4cm、器高10.7～12.6cmのもので、口縁はほぼ垂直になっている。何れもなで調整が主体をなし、坏部と筒部間の接合部には刷毛調整が、筒部内面には縦方向のヘラ削りが見られた。またNo.1、No.2、No.3、No.7には坏部内面底部に赤色色素が認められ、No.1、No.3、No.4には脚部に2個の透し穴が見られた。これは焼成前に上側から穿たれたものである。なお、No.1、No.3の口縁部付近には斜め方向の刷毛調整が、No.2には暗文と思われるものが見られ、No.2、No.3の脚部には円周方向の刷毛目が残っている。全体として比較的深い坏部をもち、坏部・筒部・脚部が明確に区分されている。整った作りのもので、胎土・焼成とも良好、色調は明黄褐色を呈する。



第7図 2号墳出土土器実測図

有段の高杯（No. 5）は、口径 21.4 cm、器高 13.0 cmで、深さ約 6.0 cmの杯部を有している。内・外面ともに内面調整が主体をなし、杯部外面と脚部内面にはかなり明確に刷毛目を残している。筒部内面には縦方向のヘラ削りが施され、口縁部は端部を外方に引き出している。杯部の段はかなり明確であるが、突帯は見

られず、角度が変化するだけのものである。この高壙も全体的に深い壙部をもち、  
壙部・筒部・脚部は明確に区分されている。胎土・焼成・色調とともに上記埴形  
の高壙と同様である。

壙（No 6）は、口径 10.0 cm、最大径 18.1 cm で、丸底倒卵形の体部をもつものである。口縁は軽く外反し、およそ 5.0 cm の高さをもつ。体部外面は刷毛調整の後なでており、内面には丁寧な横方向のヘラ削りが施されている。口縁は内・  
外面ともになでられている。2号壙出土土器中で胎土・焼成・作りとともに特に優れたものであり、他の 6 個体に比してやや赤味がかった色調を呈している。

### 3. 3号壙

#### (1) 壙丘の調査（第 8 図）

増福寺古墳群中最も高所であるとともに、この丘陵中最も高い標高 54.0 ~  
55.0 m に位置している。

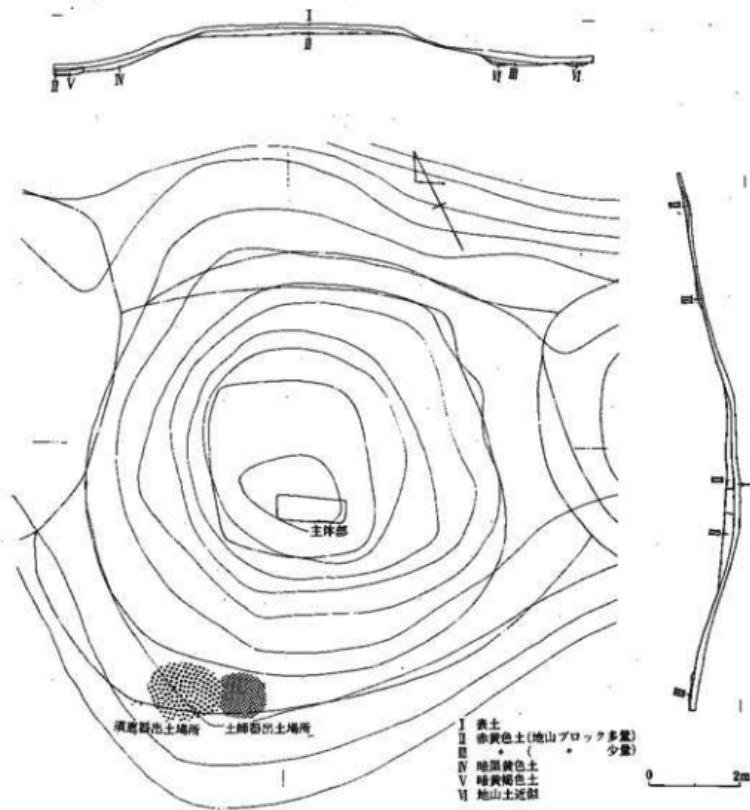
地形測量以前から、整った方壙である事がわかったが、地形測量の結果、より  
明確にその墳形・規模を知る事ができた。発掘の結果、四方は地山整形による  
平坦面が、めぐっている事がわかった。

築成時の規模は、壙丘平坦面はほぼ 7.0 m 四方・埴裾はほぼ 14.0 m 四方・高  
さ 1.4 ~ 1.7 m、裾平坦面幅 1.0 ~ 2.0 m で、2号壙側が少し広い。4号壙との  
間の平坦面は、4号壙の溝により切られている。

封土は、北東から南西へ傾斜する自然地形に沿って、旧表土上に 30 ~ 50 cm  
の盛土をしている。盛土は小さい地山ブロックを含んだ赤褐色土で、層としての  
差異は認められなかった。旧表土は、各斜面半分以上の高さの所から切断されて  
いる。2号壙の旧表土とも推定し、2号壙間の土量は莫大であったようで、本古  
墳の北側斜面を一部含めて発掘した結果、旧表土の上に地山に近い土が乗ってお  
り、若干埴裾平坦面に続くような傾向が認められた。

埴裾からは、円筒埴輪片が多量検出された。特に南西・北東側から多く検出し、  
南東側からは朝顔形埴輪片と推定されるもの数点、北西侧からは円筒埴輪とは異  
なる形象埴輪片を数点検出した。

埴裾平坦面では、北西隅より土師器高壙 5 個体以上、直ぐ横より須恵器蓋壙蓋  
・同身・甕片多数を検出した。須恵器は封土が流れ堆積した後に、若干掘って破



第8図 3号墳墳丘実測図

壊して入れたと推定される状態であった。土師器は封土と同じ土質・土色の中で、ほぼ地山直上に細片となっていた。

2号墳側からは、須恵器長頸壺・糸切り底の壊及び・土師器高壺を検出し、4号墳側溝からも土師器高壺が6個体以上検出されている。溝から検出された土師器は、検出レベル・溝セクション等より、4号墳に伴うと推定出来る可能性も高い。

上述した如く、平坦面は4号墳の溝によって切られており、3号墳の方が古いといふ事ができる。2号墳との関係は、2号墳の溝の位置等から、2号墳の方が新し

いと考えられる。従って、封土・墳丘等から推定できる前後関係は、3号墳の次に4・2号墳が築造されたといえよう。

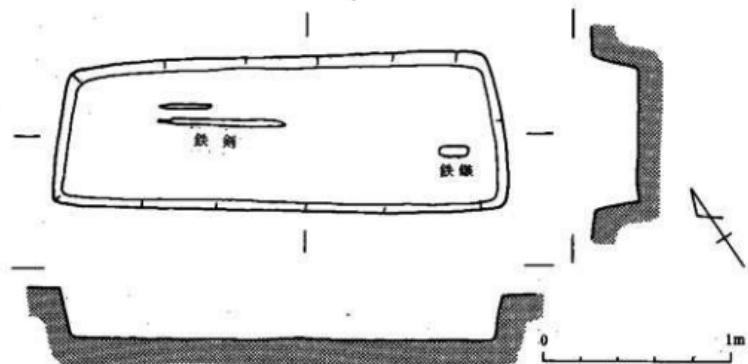
## (2) 内部主体 (第9図)

墳丘平坦部中央を南西に偏し、主軸は南西辺に平行したN-57°Wにとっている。

検出規模は、 $235 \times 85 \times 25$ cmで完全な長方形ではなく、南東端へ若干狭くなりながらの台形状を呈している。

検出中、中央部規模 $185 \times 38$ cmの周囲より異なる色の長隅丸方形部分があり、その南西辺内南部分より長い方の鉄劍が検出され、床面も黄色味を帯びていた。また同じく北東長辺内北側部分より、先端を外側に向けた鉄鎌が、16本前後束になって検出された。これは床面が黄色味を帯びていた所より、若干外側にはずれていた。その外側に、中央部規模 $235 \times 50$ cmのややしまった部分があり、長い方の鉄劍の外側に平行して、劍先が逆になった状態の短い方の鉄劍が検出された。さらに南西側に中央部規模 $225 \times 30$ cmの、より堅くしまった部分が検出された。床面で黄色味を帯びていた所と、北東側壁面との間5cmの部分が、若干凹地状になっていた。床面直下は旧表土であるが、若干旧表土部分に黄色味が侵透していた。

検出状況から推すと、木棺を掘り形の北東側長辺に接して置き、その後木棺周辺に詰土をし、最後に残りの部分を堅くしめて、盛土をして完成したと考えられる。



第9図 3号墳主体部遺物出土状況図

遺物は、床面直上ないしやや上面で検出された。短い方の鉄劍は、木棺内にあったものが、長側板の朽ちた時に外側へ押出されたと考えられる。

### (3) 遺物

本古墳から検出された遺物は、埴輪・土師器・鉄劍・鉄鎌・須恵器である。

埴輪の整理中、類焼という不慮の事故に逢ったが、事後処理中に協力を得る事ができ、検出総数の  $3/4$  を回収する事ができた。図版中黒色になっているのはその為であり、焼成時のものではない。なお焼成時にできたものと推定されるものが、ごく一部であるが斑点状の黒色部が見られた事を記しておく。

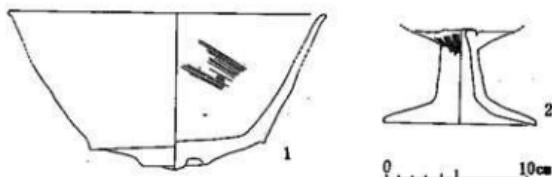
以下、古墳築造時に伴っていない須恵器を最後として、土師器・埴輪・鉄劍・鉄鎌の順に説明していく事とする。

・土師器（第10図） 3号墳出土土器のなかで、土師器は墳丘北西側の裾から出土している。これは、若干の広がりをもった範囲内に散乱しており、全て原形を留めない程に破壊されていたが、意識的な破壊か否かは判明しない。接合による復元も思うに任せず、2点を図示するに留めた。

これらの土師器は筒部の数等により、5個体以上の高坏の存在が認められ、高坏以外の器種は出土していない。

No 1は有段の高坏であり、口径 22.3cm、深さ 9.1cm（何れも推定）を有する。明確に下方に突出する段と、丸い端部を外方に引き出した口縁をもっている。調整はなでを主体とするが、内面一部には斜めの刷毛目が残り、外面にはヘラ磨きが施されている。脚部との接合部は、宝珠状の突出部の回りに外輪山状の突堤をもつたものである。比較的深い坏部を持ち、胎土・焼成ともにやや良好、色調は灰橙色を呈する。

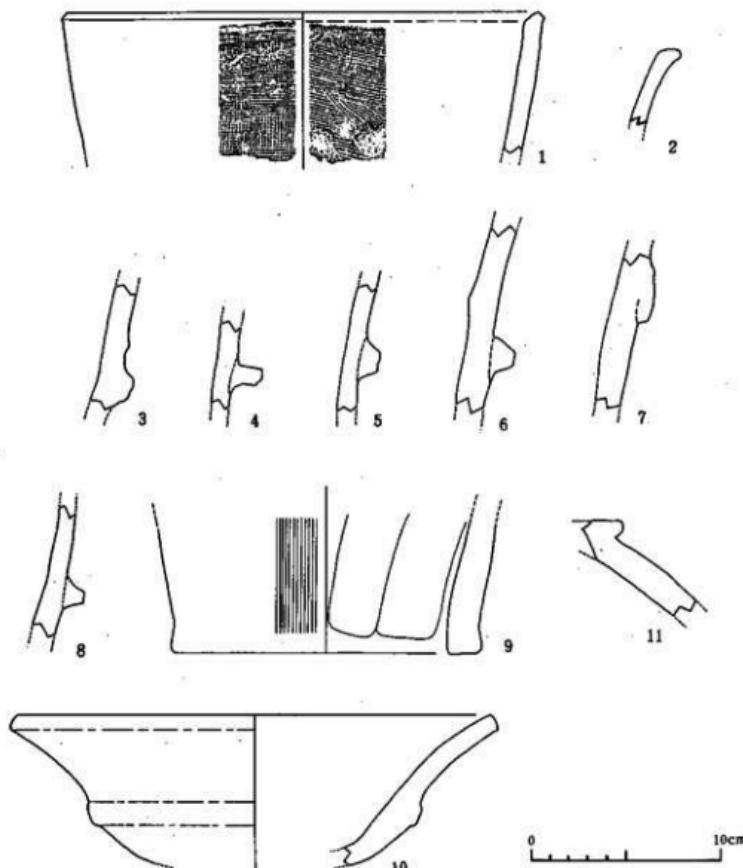
No 2は高坏の脚部であり、現存高 6.6cm で、脚高 5.3cm を測る。内・外面とも



第10図 3号墳出土土器実測図

になで調整が主体であり、坏部と筒部との接合部に刷毛調整が、筒部内面には縱方向のヘラ削りの後に、円周方向のヘラ削りを施した跡が見られる。全体として坏部・筒部・脚部の3体はしっかりと区分されており、胎土・焼成・色調ともにNo 1と同様のものである。

埴輪（第11図） 塩輪は塙端部全域に著しく細片化して散在しており、塙丘上からの出土はほとんどなかった。量的には平箱5箱分程が存在していたが、細



第11図 3号塙出土遺物実測図

片化が著しいため復元は不可能であった。多くは円筒埴輪片であったが、朝顔形埴輪と思われるものも若干出土した。

円筒埴輪は9片を図示した。No.1は尖った端部をもつ口縁部であり、推定径25.2cmを有する。外部に縱横両方向の、内部には斜め横方向の刷毛目が見られる。No.2は外広がりの端部であり、内外に横方向の刷毛目がある。No.3～No.8は突帯のバラエティを示す。No.3には丸い透し穴の一部が見られる。No.9は底部であり、推定径16.0cmを有する。外面に縱の刷毛調整、内面に縱方向のヘラ削りが施されている。以上全てを通じて胎土・焼成・色調ともに一定しないが、一般的に良質のものは灰橙色を、粗質なものは黄褐色系の色調を呈する。

No.10、No.11は朝顔形埴輪と思われるものである。No.10は口縁部であり、推定径24.6cmである。調整等は風化が著しく見られなかった。No.11は肩部と思われ、外面には縱方向の刷毛目が見られる。

**鉄劍** 主体部から2本の鉄劍が出土した。出土状況(第9図)は、長い方の劍が劍先を南東に向けやや木棺外へ傾斜し、短い方の劍は劍先を北西に向け木棺外と推定される所にほぼ水平に置かれていた。

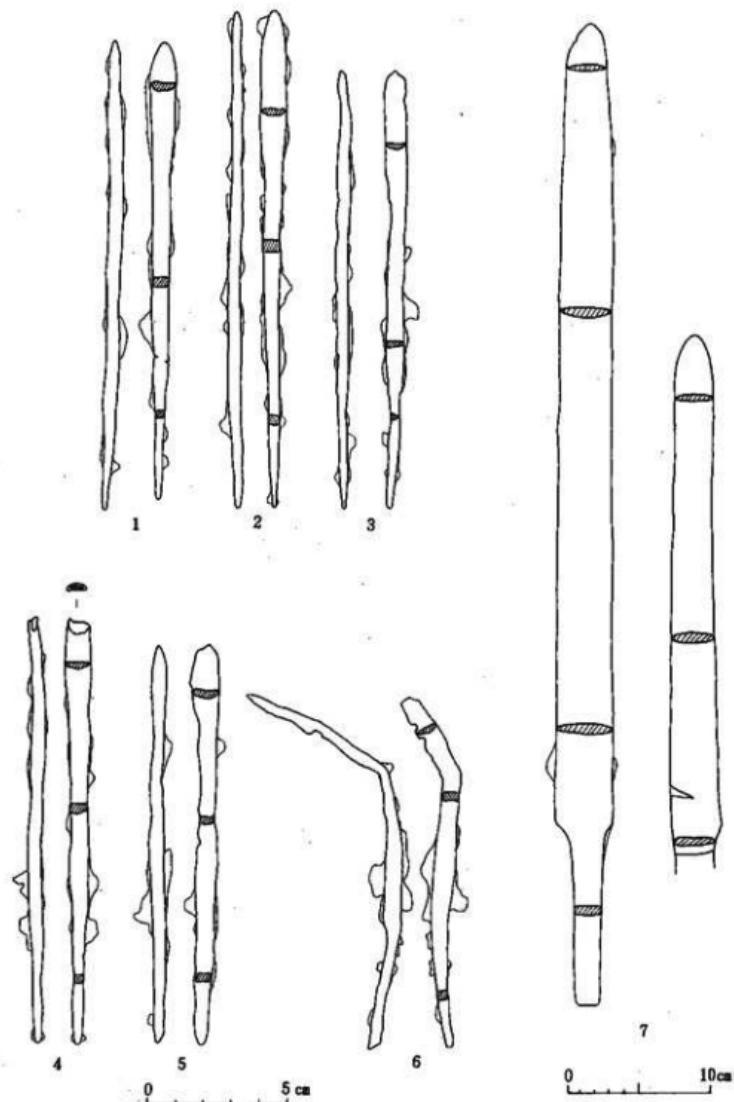
長い方の鉄劍(第12図)は、小片になっていたものの完全に残っていた。全長69.0cm・幅3.5cm・厚さ0.8cm・基の長さ13.0cm・関部の幅2.5cm・基の厚さ0.8cmをはかる。鎬は不明で、関部2cm前後の幅で片側のみ銹色が異なっており、目釘穴はみられなかった。

短い方の鉄劍(第12図)は、同様に小片になっており、基部の大半が消失していた。残存長36.4cm・幅3.0cm・厚さ0.7cm・基の残存長2.0cm・関部の幅2.6cm・基の厚さ0.6cmである。鎬は不明で、関部に幅2.8cmの木片が劍身に平行して両側面に、同じく残存高1.5cmの木片と考えられるものが茎を巻くかのように片面に、各々銹着している。

出土状況から、長い方の劍が下に短い方の劍が上に、各々劍先を逆にして壁際に置かれていて、棺材腐食時に短い方の劍が外側に、押出されたものと推定される。

**鉄鍔** <sup>註1</sup>木棺内北西端中央に、先端を北西(木棺外側)へ向けて、16本前後束をなして出土した(第12図)。

出土時にはある程度形を保っていたが、取上げ後の残存状態が悪く全形実測に



第12圖 3号墳出土鐵製品実測図

堪えるものは少なく、接合不可能なものが多かった。そこで比較的全形を残した6本を中心に説明していく事とする。

すべて尖根鉢の、先は尖り片丸造りに属す身であり、鋸化が著しく開は不明瞭であるが確認できた。棘についても、鋸化が著しく不明瞭であるが、笠被と茎の境に明確な突起はないようで、境がくびれる程度のものと考えられる。

矢先の幅の広狭で、狭いNo.3・No.6と、広いNo.1・No.2・No.4・No.5に分けられる。そして、No.6は、何らかの力で曲がったものと考えた時、No.3とほぼ同じ長さとなり、矢先の長さもほぼ同じである。矢先の長さで、No.2は他に比べ極端に長く、No.4・No.5は同じ長さであるが、これも他に比べて短い。

No.1・No.4・No.5の、各1/3程度茎先より矢先の方で、細い棒状のものの痕跡が直交するように残っていた。No.1は斜め方向であったが、茎の痕跡としては細すぎる為に、何か針金状のもので束にした時のものではないかとも推定される。

各茎部には、直交した繊維組織が鋸着した痕跡があった。

以上鋸化の著しいなかで、詳細な観察ができなかったが、後藤氏分類による尖根棘笠被片丸造柳葉式に属すと考えられる。

註1 「高野2号横穴発掘調査報告書」八雲村教育委員会 1980年

後藤守一 「原史時代の武器と武装」『考古学講座』雄山閣 1929年

須恵器（第13・14図）須恵器は土師器出土地点を中心にして、墳端の西半分全域に分散していた。これらも著しく細片化されていたが、接合復元の結果25個体が確認され、ほぼ完形となるものもあった。器種別には蓋坏蓋8、同身13、長頸壺1、壺3である。

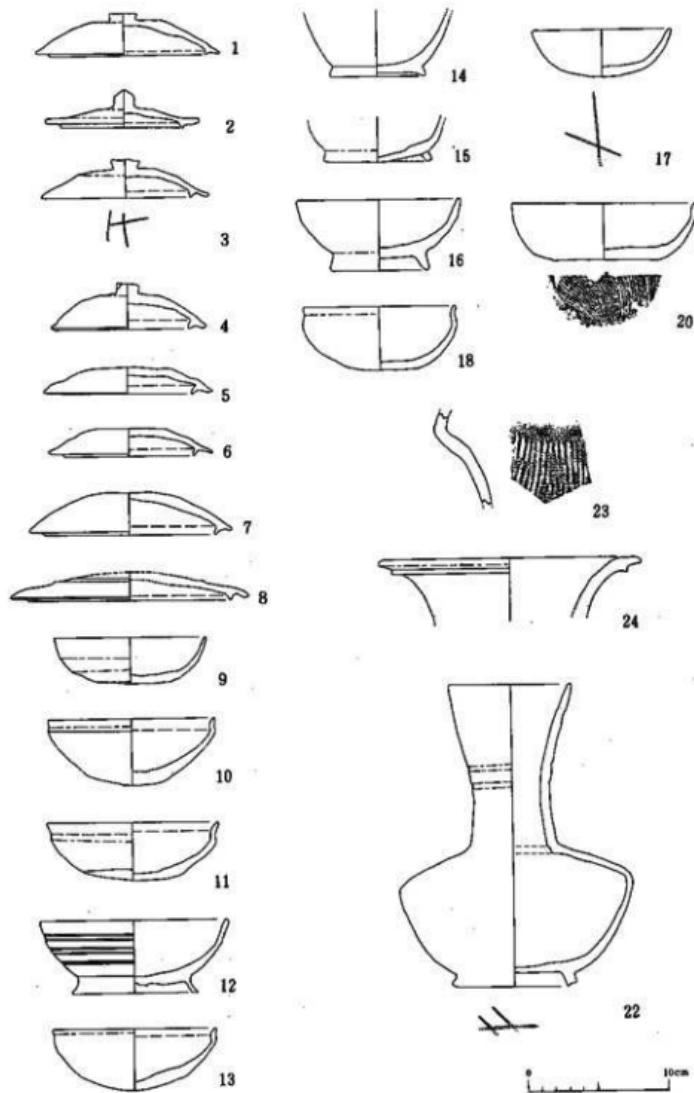
蓋坏蓋（No.1～No.8）は何れもかえりのつくものであり、つまみをもつもの（No.1～No.4）ともたないもの（No.5～No.8）がある。

No.1、No.3、No.4は円盤状のつまみをもつものであり、内傾するかえりと軽くそる端部をもつ。

No.2は宝珠状のつまみをもち、かえりはやや外反し、水平に近い端部をもつものである。外面には全面に自然釉がかかっている。

これらは何れも内面外部を回転なしで、中央部を横なしで、外面外部を回転なしで、中央部を回転ヘラ削りで調整している。

No.5、No.6は何れも内傾するかえりと軽く反った端部をもつものであり、外部



第13図 3号墳出土須恵器実測図

全面に自然釉がかかっている。

No 7 は比較的器高の高いものであり、内傾するかえりをもっている。

No 8 は低い器高と、ほぼ直立するかえりをもつものである。

これらの調整技法は基本的につまみのつく類と同様である。

蓋坏の坏は、底部に高台のつくものと、つかないものとがある。

高台のつくもの（No 1 2、No 1 4、No 1 5、No 1 6、No 1 9、No 2 1）のうち、No 1 9 は部分的な細片であり、No 2 1 は高台の落ちた皿状の底部のみであるため図は略した。

No 1 2 は外反する丸い口縁をもつ坏部に、底が平らな台を付けたものであり、坏部に2条3単位のヘラ描き沈線が施されている。整った作りである。No 1 4 は高台の低い、坏部の深いものであり、口縁部を欠いている。No 1 5 も口縁部を欠いており、先の丸い低い高台をもつ、雑な作りのものである。No 1 6 は外反する丸い口縁をもつ坏部に、先の丸い、比較的高い高台をつけたものである。

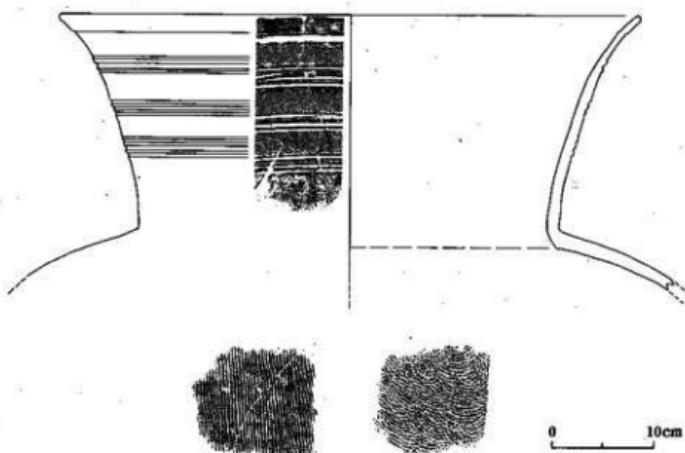
これらは何れも外面を回転なしで、内面上部を回転なしで、底部を横なでで調整したものである。

高台のないものは、口縁の単純なものと、反るものとがある。No 9 は外反する丸い単純な口縁を有するものであり、No 1 7 はNo 9 よりも大きく外反するものである。No 1 0 は外反する口縁が一度反って内傾し、再び外反するものである。他のものも反り方に多少の違いはあるが、おおむね同系列のものと言えよう。何れも外面は回転なしで底部の横なで、内面も回転なしで底部の横なでをもって調整しているものである。

以上蓋坏の類は胎土、焼成、色調ともに異なる（いくつかのグルーピングは可能であるが）ものであり、統一はとれていない。

なお、No 2 0 は糸切り底を有しており、No 3 は内面、No 1 7 は外面それぞれ中央部にヘラ描きによる沈線が見られる。

長頸壺（No 2 2）は、口径 8.4 cm、最大径 16.4 cm、器高 21.2 cm のものである。外反する丸い口縁が一度細くなり、また外反をする所で急激に広がる肩部となる。そして、ゆるやかに傾斜する肩部は、胸部上方で角度を変えて内傾し、平らな底部へとつながる。底部には断面台形をなす高台がつく。口縁部中央やや下よりには凹帯が2条めぐり、底部にはヘラ描きによる沈線が見られる。肩部と口



第14図 3号墳出土須恵器実測図

縁部の境で接合したものと思われる。胎土、焼成とともに良好で、灰色を呈する。外面にはほぼ全面に自然釉がかかっている。

壺のうち、No.2・3は肩部である。外面にたたき目、内面に青海波状文が見られる。No.2・4は大きく外反する口縁部である。端部近くに1本の突帯をもち、口径18.8cm（推定）を有する。

3号墳からは他に大形の壺が1個体出土している。これは口径56.4cm（推定）のものであり、口縁部を11本の歯のクシ状工具からなる波状文帯と、ヘラ状工具による3本の回帯からなる回線帯を、それぞれ3条ずつにより飾られている。やや外反する口縁が高さ約21.0cmにわたって続き、丸く大きくふくらむ胴部へと続くものである。胴部外面には叩き目が、内面には青海波状文が見られる。

#### 4. 4号墳 (Z04)

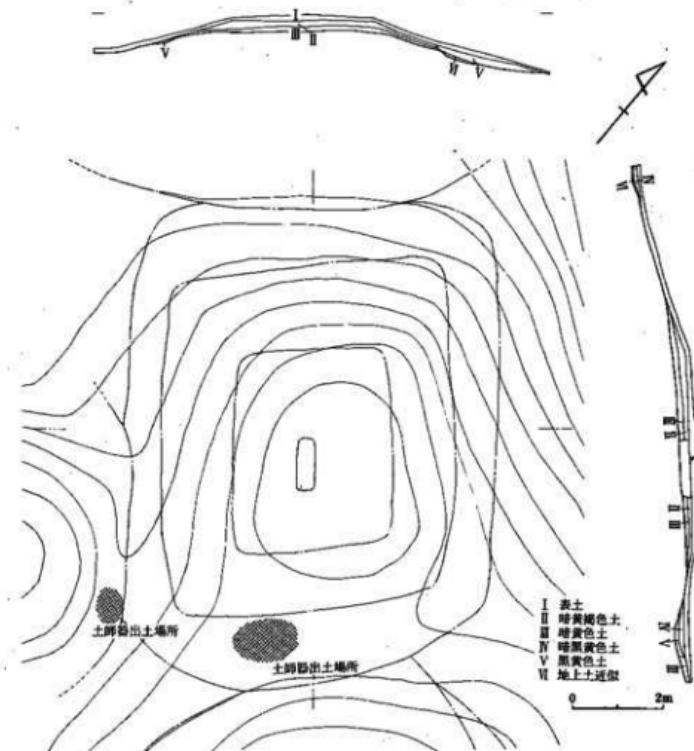
##### (1) 墳丘の調査（第15図）

本古墳は3号墳を頂点として、北西方向に伸びる尾根上、標高52.5～53.7mに位置する。

地形測量以前より、北西に若干長い方墳であると認められたが、地形測量により一層明瞭になった。

発掘の結果、主軸N—43°—W方向に若干長い方墳で、3号墳との間に深い溝があり、北西側裾は地山整形をし、若干の傾斜をなしているが、その外側に溝の南東端が検出され、現杉畠及び畠になっている所に古墳があった可能性がある。南西側5号墳との間は地山整形による平坦面があり、南隅は傾斜しているが、5号墳の溝が切っているようである。北東側も地山整形をし、自然傾斜の端の方に土砂を堆積させて、若干の傾斜はしているものの平坦面をなしている。

築成時の規模は、墳丘平坦面  $7.5 \times 6.0\text{ m}$ ・墳體  $12.5 \times 10.5\text{ m}$ ・高さ3号墳側  $0.6\text{ m}$ ・北西側  $2.0\text{ m}$ 、裾平坦面幅  $1.0\text{ m}$ 前後、3号墳間溝幅  $2.0\text{ m}$ ・深さ



第15図 4・5号墳墳丘実測図

0.5mである。内部主体は、墳丘平坦面のほぼ中央墳丘主軸とも大体一致している。

封土は、3号墳側から主軸方向に傾斜する旧表土上に、平坦面を形成するよう3層の堆積をしていた。下から2層は主体部により切れており、上1層は主体部を被っていた。封土の厚さは、40~70cmであった。

封土及び裾平坦面からは、遺物等は検出されなかったが、3号墳間の溝中央より南西側において、地山上の土層より土師器高坏が検出されている。確実にどちらに伴うかは断定できないが、本古墳に伴う可能性がある。

3号墳との関係は、3・4号間溝セクション観察によると、3号墳の平坦面がある程度埋まった時、4号墳の溝を3号墳平坦面中央部を、垂直に掘込んでいる状態である。従って、4号墳の方が新しいとみてほぼ誤りないであろう。

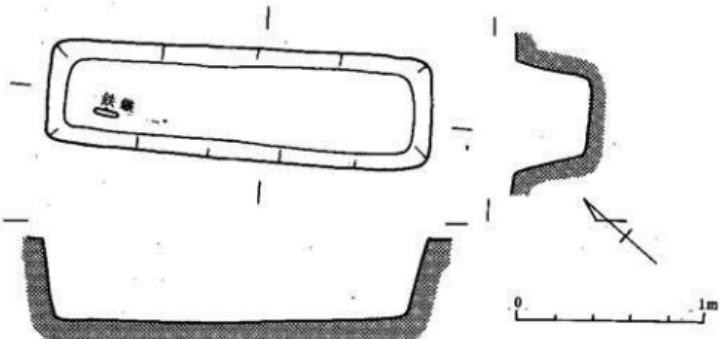
## (2) 内部主体（第16図）

墳丘平坦面のほぼ中央に、主軸をN-40°-Wにとって造られている。

表土を剥いだ段階で、2個の川原石が検出された為、注意深く清掃した結果、 $2.05 \times 0.6m$ の長方形プランが検出された。

内部土層は3~4層であり、上部1層は木棺が朽ちた時の被土の流込みである。下部1層は、旧表土の変化ないし床土と旧表土の変化した土層と考えられる。木棺直葬であろう。

遺物としては、主軸北西端において床面真上に、鐵鎌が矢先を外側にして約20本束になって検出された。



第16図 4号墳主体部遺物出土状況図

### (3) 遺物

土師器（第17図） 3号墳との間の溝中から土師器のまとまった出土がみられた。これらの土師器は3号墳に伴なう可能性もあるが、3号墳・4号墳の切り合い関係と土師器出土地点のレベルから見て、また3号墳から出土した土師器とは型式差をもつところから、4号墳のものとする可能性は高いと思われる。

ここからは、6個体以上の高坏の存在が確認された。しかし、出土状況は3号墳出土の土師器と同様であり、図示するものも1点のみに留めた。これは有段の高坏の坏部であり、口径17.4cm、深さ6.0cm（何れも推定）を有するもので、内・外面ともに円周方向の刷毛調整の後、なでている。底面には太い刷毛目が見られる。段は明確であるが、突蒂は見られない。口縁部は軽く外反し、端部は丸い。比較的浅い坏部をもち、作りもやや雑であるが、胎土・焼成ともやや良好で、赤橙色を呈する。

<sup>註1</sup> 鉄鎌（第18・19図） 主体部主軸北西端において、床面の直上で矢先を主体部外側に向か、約20本が束をなして検出された。No.1、No.2は、他の鎌の方向と直角をなしていた。錆により、個々に分離できなかったので、そのままの番号付けで実測をした。

いずれも尖根鎌に属するが、矢先の形状により、片丸造柳葉式と片刃矢あるいは剣形とに分けられよう。

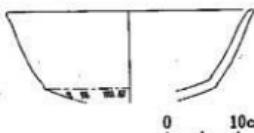
No.4-2・No.5-2・No.5-3・No.7-2・No.13・No.14は、3号墳出土のものとほぼ同型式と考えられる。

関は不明瞭であるが、大体確認できた。棘については、笠被と基の境に明確な突起はなく、境ではっきりとした段を有しているようである。

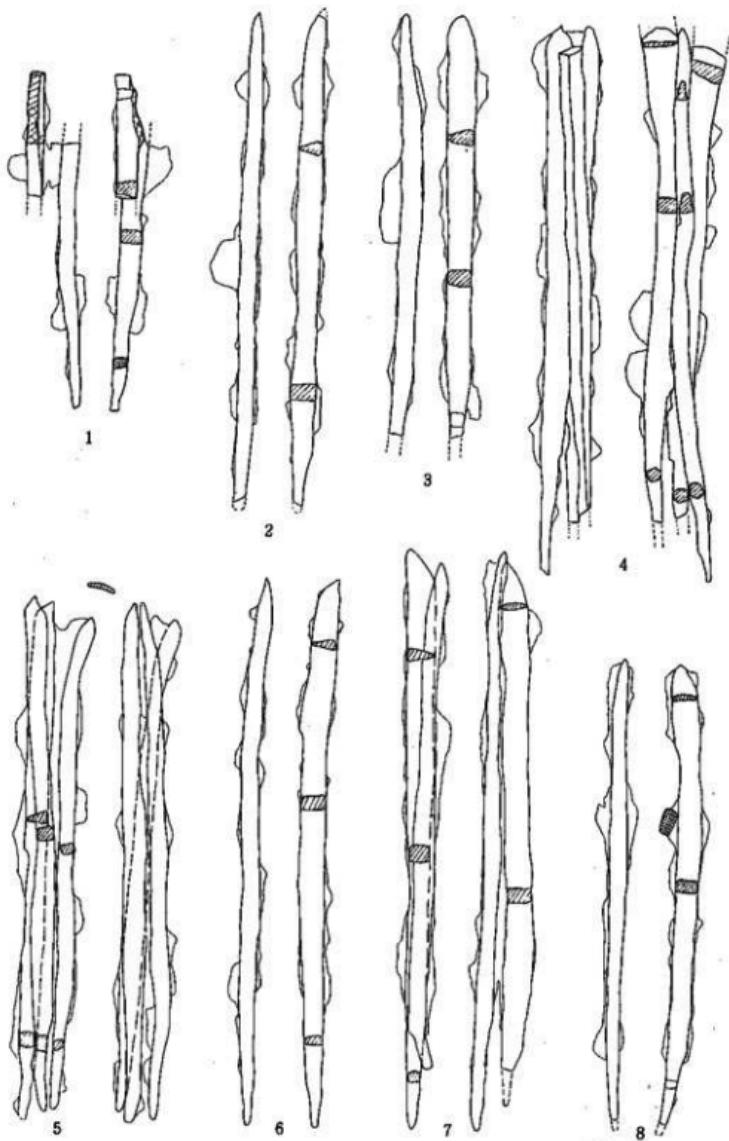
矢先幅はほぼ1.0cm前後であるが、No.4-2・No.7-2・No.14とNo.5-2・No.3・No.8・No.13とに分けられよう。

個体別相異であろうが、No.4-2とNo.7-2・No.5-2・No.5-3とNo.13・No.8とNo.14が、各々似通った点を有している。

以上のような点で、No.4-2・No.5-2・No.5-3・No.7-2・No.13・No.14は、尖根棘笠被片丸造柳葉式と考えられる。

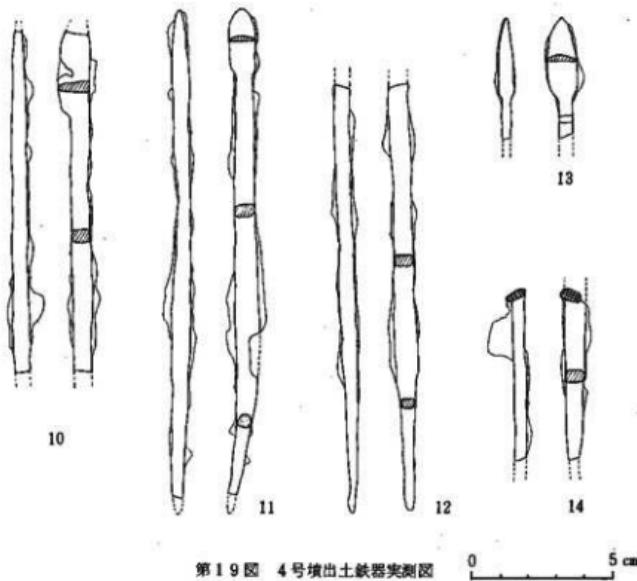


第17図 4号墳出土土師器実測図



第18圖 4號墳出土鐵器實測圖

0 5 cm



第19図 4号墳出土鉄器実測図

0 5 cm

No. 2・No. 3・No. 4-1・No. 5-1・No. 6・No. 7-1・No. 10は、同一形態に属するものと考えられるが、No. 2において闊がみられない事から、細分できるかとも考える。

棘については、銹化の為不明瞭であるが箆被と基の境にははっきりとした段を有していたとみられる。いずれも矢先形状が、小刀状を呈している。

矢先の長さで、No. 10が最も短く、No. 7-1が最も長い。No. 3とNo. 6・No. 4-1とNo. 5-1が、各々同一形態に属する。No. 2は他に比べ若干短い事、闊がみられる事などから、区別されるであろう。

以上のような点で、No. 2・No. 3・No. 4-1・No. 5-1・No. 6・No. 7-1・No. 10は、尖根棘箆被片刃式と考えられる。

No. 4-3は、矢先が見られないので、形態等を推定できにくいが、他のものとは全く異なった形態のものか、同一と考えた場合、矢先が非常に大きいものとなろう。

No 1 - 1・No 8・No 15には、布痕と推定されるものが銹着していた。No 15の場合、折れた断面に銹着していて、埋葬時から折れていたものかとも考えられる。出土状態の中で、No 1 と No 2 が他とは異なった状況を呈していた事からも、考えてみる必要がある。

本古墳の鉄鎌を、3号墳の鉄鎌と比べてみた時、状況について次の事が明確にわかる。

第一に残存状況において、4号墳のものが良いという事である。従って、闇・笠被と基の境について、かなり明瞭に判断できた。これと関連するが、銹色が全く異なっている。

第二に形状において、4号墳のものが長く太いという事である。3号墳のものの長さが15.0cm前後なのに対して、4号墳のものは、18.0cm前後であり、長いものは20.0cm前後のものもあるほどである。厚さも0.2cm前後の差がある。

註1 『高野2号横穴発掘調査報告書』八雲村教育委員会 1980年

後藤守一 「原史時代の武器と武装」『考古学講座』雄山閣 1929年

## 5. 5号墳 (Z05)

本古墳では、造成計画線まで発掘した時、黒色土層が検出され、その中に4個体の土師器の出土をみた(第15図)。

黒色土層は、溝及び平坦面と考えられる。4号墳の裾平坦面を若干切り込んでいた。

土師器は、黒色土層の地山面より若干浮いた所で、検出された。

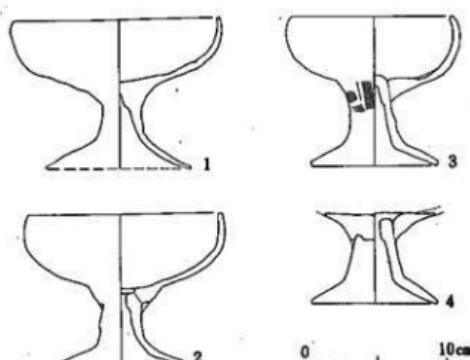
### (1) 遺物

土師器(第20図) 本墳からは土師器高杯4個体の出土が見られた。これは5号墳東側の溝から出土したもので、5号墳の他の部分は未掘のため、これ等以外の遺物の有無は判明していない。また、唯一ほぼ完形で出土したもの(No 1)は逆さ向きになって置かれていたが、原位置を保っていたとは思われない。何れにしても出土状態から見て、本墳に伴なうものであることはほぼ間違いない。

これらは全て塊形の高杯であり、口径11.0~14.2cm、杯部の深さ4.1~5.1cm(何れも推定を含む)のものであり、やや内傾気味の丸い口縁を有している。調整はなでが主体であり、杯部と筒部との接合部には刷毛調整が施されてい

る。

全体を通じて胎土は良質、焼成はやや良好のもので  
あり、色調は赤黄褐色  
(No.1、No.2)、灰橙色  
(No.3、No.4)を呈して  
いる。坏部は2号墳出土品  
に較べてやや浅めのもの  
であり、坏部・筒部・  
脚部の区分が不明確なも  
のであり、比較的作りも  
雑である。



第20図 5号墳出土土器実測図

なお、No.2、No.3は図上の復元である。

## V 結語

これまでみてきたように、この増福寺1～5号墳を含む古墳群は土井古墳群と尾根つづきでその南及び東側にあり、密集している上に尾根単位で更に小支群に分かれるようである。そして尾根ぞいにこれ等の古墳は作られており、墳丘は旧地表つまり地山の表土を丁寧に削り取って整地することなく盛土をしており、5基のうち中心と考えられる3号墳、4号墳は地山面と主体部下面が同一レベルを示している。これは少々の盛土をした後主体部の墓擴を掘り込んだことを考えしめるものである。

遺構=内部主体は木棺直葬がすべてであるが、中でも4号墳のものは深い。いずれも単純な長方形をなすもので、頭部の方がやや広くなっている。

遺物は土器（土師器、須恵器）と鉄器（剣二本、尖根鐵）、埴輪があるが、年代を考える上できめ手となるのは土器である。この土器の編年観については別に考察したが、土師器の高坏を中心とする時期があり、その後に古式の須恵器（山本 清氏編年のⅠ期末乃至はⅡ期初頭）がともなっている。所謂Ⅰ期の須恵器は県内でもごく限られたものであり、当方の窯で焼かれた須恵器が地方の古墳、しかも規模も余り大きくないものに、量的にも坏の身一個体という状況で供献されているのは注目されて良い。3号墳にともなった埴輪は朝顔形をなすものもあって細片化しているので詳細は明らかでないが、焼成、たがの作り方などからして6世紀半ばに降るものではない。そしてこの埴輪は築造時期にともなうものであったと判断される。

以上のような状況からして、これら5基の古墳は、最も高い位置にあって副葬品の豊富な3号墳が古く、次いで鉄鎌をともなった4号墳、それから土師器高坏7個体を溝にともなう2号墳、5号墳、古式須恵器を供献した1号墳という具合に、尾根上の順位はややずれるが、基本的には尾根の先端部に向って築造されて行ったようである。このようにみると増福寺1～5号墳は全体で19基を占めるこの古墳群の中で尾根を占有して世代墓的に、土器形式で言えばⅠ期=約50年ぐらいの間に次々に築造されて行ったと思われる。なおこれらの古墳は築造後かなりの時期をおいても祭祀が行われていたようで、例えば、3号墳南

据の一群の須恵器蓋坏は6世紀末から7世紀に降るものであり（横山純夫氏編年の狐谷Ⅲ式併行）、また2号墳でも埴丘裾に埋葬後火をいたたがとみられる。これはこれら古墳がかなり後の時期まで聖域として考えられていたことを考えしめる。そして最後にこれら5基のうち時期が最も古いと考えた3号墳にのみ埴輪があり、副葬品も立地もしっかりしたものであることを考えあわせると、この古墳の被葬者が増福寺古墳群の中でもかなりの地位を占めるものの墳墓であったことを考えしめるものがある。

ちなみに本古墳群の調査に先立って調査された土井13号墳は木棺直葬一辺8.5メートルの方墳であったが、副葬品をともなわず、わずかに周溝内に供獻された土師器塊が検出された。この土器の時期については多少見解が分かれるところもあるようであるが、須恵器I期墳迄のものと考えられる。そうなると、今回調査した1～5号墳との関連が注目されるのである。そして墳形が方墳であること、從来八雲村で確認され、未だ調査を経ていない古墳には、まだまだ数多くの小形方墳が含まれていることを示唆していく興味を引かれるところである。

#### （東森）

今回の調査では、5基全ての古墳から土器の出土が見られた。従って、古墳の築造時期や出土土器から見た問題点について簡単な総括を行なうこととする。

先ず出土土器と遺構との関係であるが、1、2、5号墳の出土土器は既述のごとく遺構に伴なうものと考えられる。ところで、3号墳の出土遺物を見てみると、土師器・埴輪は他の3基の出土土師器とはほぼ同時期であり、須恵器はかなり後出のものである。そして、土師器の出土状況や埴輪の性格等を考え合わせると、須恵器は古墳築造時のものとはなり得ないと思われる。また、4号墳出土土師器も3号墳出土の土師器等と遠からぬ時期のものであり、また同様の出土状況を示す点からもやはり古墳に伴なうものと考えられる。従って、本古墳群築造時の遺物としては、1号墳の須恵器、2・3・4・5号墳の土師器と3号墳の埴輪とが挙げされることになる。

ここで、増福寺1～5号墳とほぼ同時期と思われる古墳を見てみると、松江市薬師山古墳<sup>(1)</sup>、金崎1号墳<sup>(2)</sup>、荒神谷方墳<sup>(3)</sup>、東出雲町大坪3号墳<sup>(4)</sup>、安来市御立山古墳群<sup>(5)</sup>等が挙げられる。そして、その出土土器を詳細に観察すると、増福寺1号墳の蓋坏は荒神谷方墳出土品と同様のものであり、口唇の作りやたちあがりを見ると、

薬師山古墳出土品より後出で、御立山1群2号墳よりもやや古い様相を示すと言えよう。

また、増福寺2号墳の埴形高坏は御立山1群4号墳出土品と同様のものであり、大坪3号墳Pit出土器とは全体的な作りや坏部の深さ、坏底部の反り方等に型式差を思わせるものがある。増福寺5号墳の埴形高坏は大坪3号墳Pit出土品と同様のものである。

有段高坏を見てみると、増福寺2号墳出土土師器は、同4号墳出土品、薬師山古墳出土品とほぼ併行と思われるものである。ただ薬師山古墳出土の脚部は増福寺5号墳出土のものに近く、やや後出とも考えられ、また増福寺3号墳出土土師器は、段部等にこれらよりも古い様相をもつものである。

以上の点に加えて大坪3号墳Pit出土の趣は薬師山古墳出土例より後出であるが、山本清氏による山陰の須恵器編年<sup>(1)</sup>Ⅰ期に含まれること、荒神谷方墳の蓋坏は同Ⅱ期のものと理解される点を考えると、ほぼ図のごとき編年の位置が考えられるのである（第21図）。

従って、本古墳群の築造時期（1～5号墳について）は、山本編年の須恵器Ⅰ・Ⅱ期併行期にはほぼ入るものと言えよう。また、その築造順は

3号墳→2号墳→4号墳→5号墳→1号墳としてほぼ間違いないと思われる。

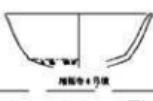
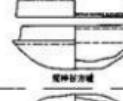
しかし、当該期の遺物は島根県内での出土例が少なく、また須恵器と一括出土した例も少ないため、まだいくらかの不確定要素を含んでいると言えよう。今後の資料の増加をまって是非を決定されたいと思う。

また、3号墳から出土した須恵器は何れも山本編年のⅣ期に含まれるものであり、またその多くは狐谷編年のⅢ式<sup>(2)</sup>併行と思われるものである。これが古墳とどう関係するのかは不明であるが、単なる廃棄とは思われない散乱の状態であり、後世何等かの祭祀を行った可能性も考えねばならないと思われるのである。

（房宗）

・註

- (1) 山本清「島根大学敷地薬師山古墳遺物について」『山陰古墳文化の研究』(1955)
- (2) 山本清「山陰の須恵器」『山陰古墳文化の研究』(1960)
- (3) 「大坪古墳群」「国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ」(1976)
- (4) 杉原莊介・大塚初董編「土師式土器集成本編2（中期）」東京堂出版(1972)
- (5) 山本清「山陰の須恵器」前掲
- (6) 横山純夫氏による編年『島根県埋蔵文化財調査報告書VII』(1977)

		土 器	須 意 器
	○増福寺3号墳		
I 期	○増福寺2号墳		
	○荒神山古墳		
	○増福寺4号墳		
II 期	○大坪3号墳Pit		
	○増福寺5号墳		
	○増福寺1号墳		
III 期	○荒神谷方墳		
	○御立山1号2号墳		

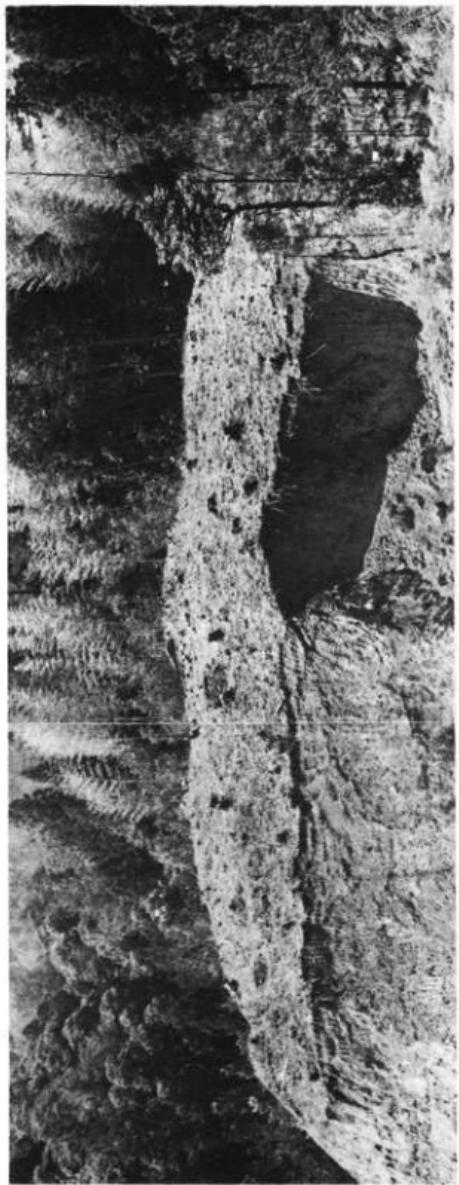
(房宗編)

・時期は、山本清氏の山陰の須意器編年による。

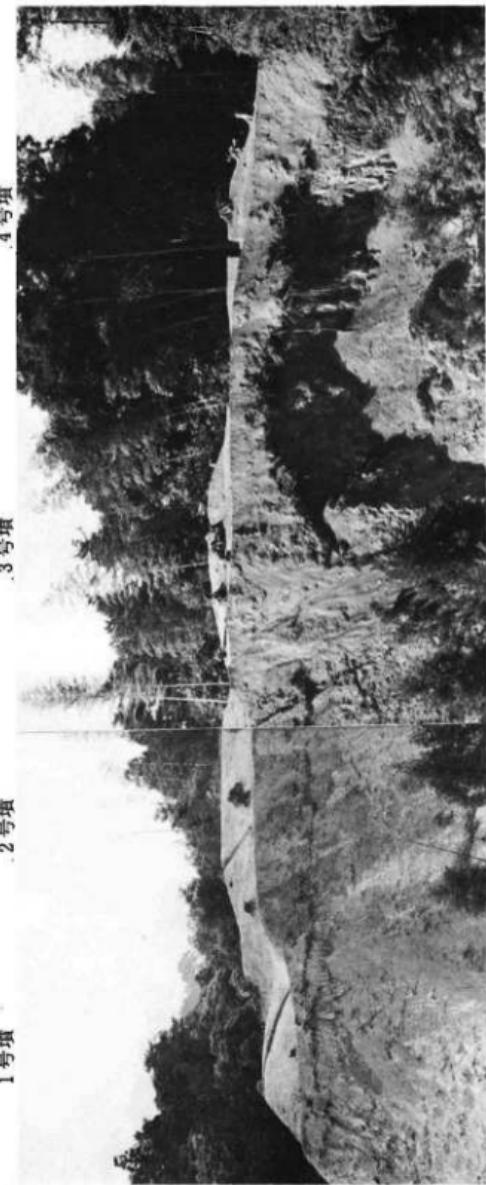
・本図の縮尺は1/6である。

第21図 編年図

## VI 図 版



1 発掘前遺跡遠景（北東より）



2 発掘後遺跡遠景（北東より）

4号墳

3号墳

2号墳

1号墳

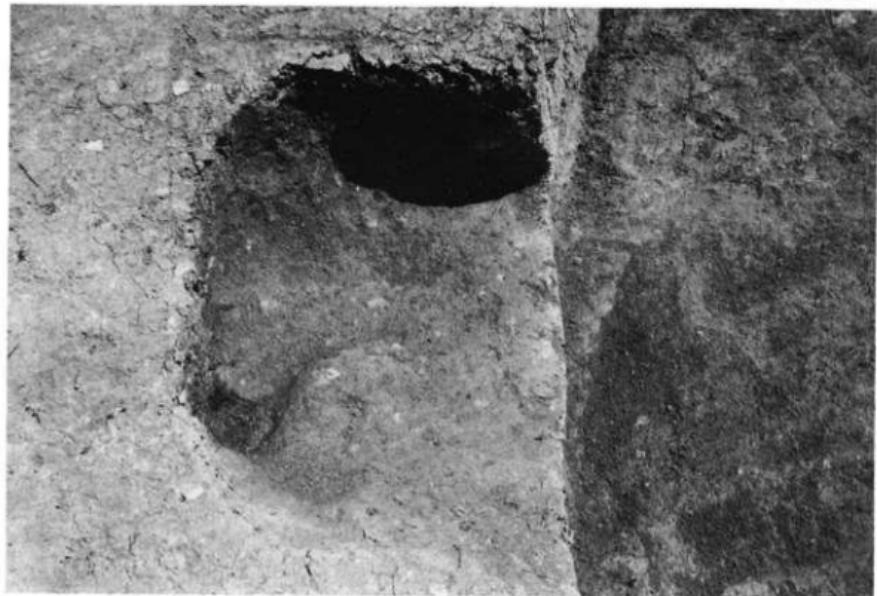
図版II



1 1号墳発掘前遠景（西より）



2 1号墳発掘後遠景（西より）



1 1号墳主体部 (南西より)



2 2号墳発掘前遠景 (北西より)

図版IV



1 2号墳発掘後遠景（北東より）



2 2号墳土師器出土状況（北より）

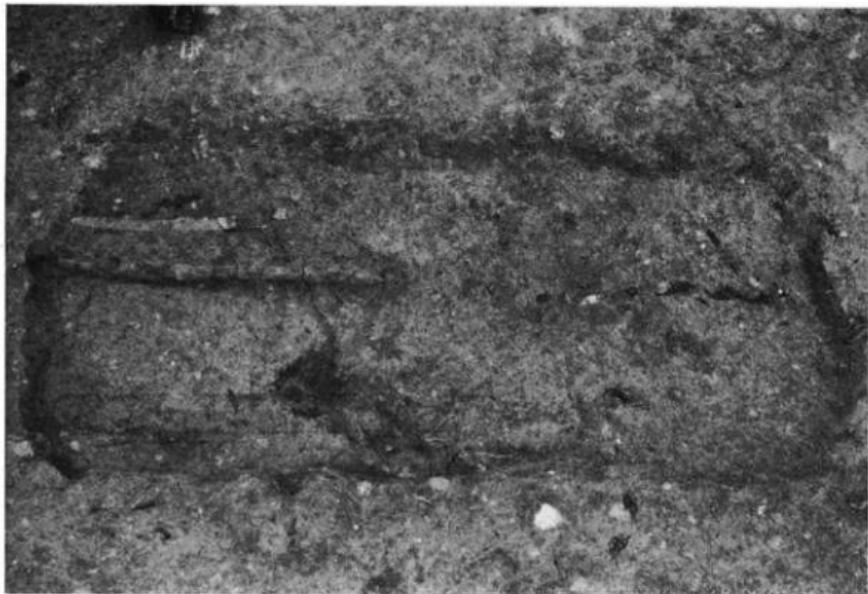


1 3号填発掘前遠景（北西より）



2 3号填発掘後遠景（北西より）

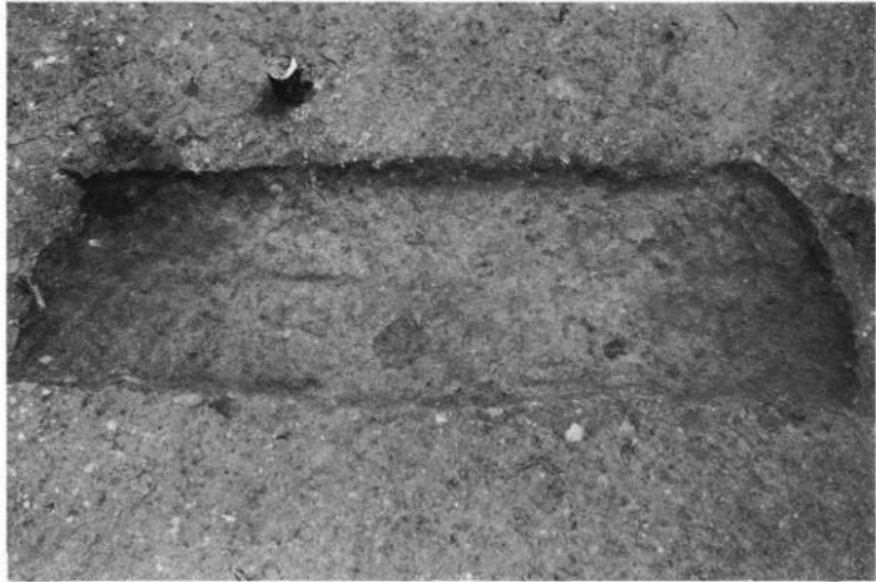
図版VI



1 3号墳鐵剣出土状況（北より）



2 3号墳主体部鉄鎌出土状況（北より）



1 3号墳主体部（北より）



2 3号墳北西隅掘須恵器出土状況（北西より）

図版VIII



1 4号墳発掘前遠景（3号墳より）



2 4号墳発掘後遠景（3号墳より）

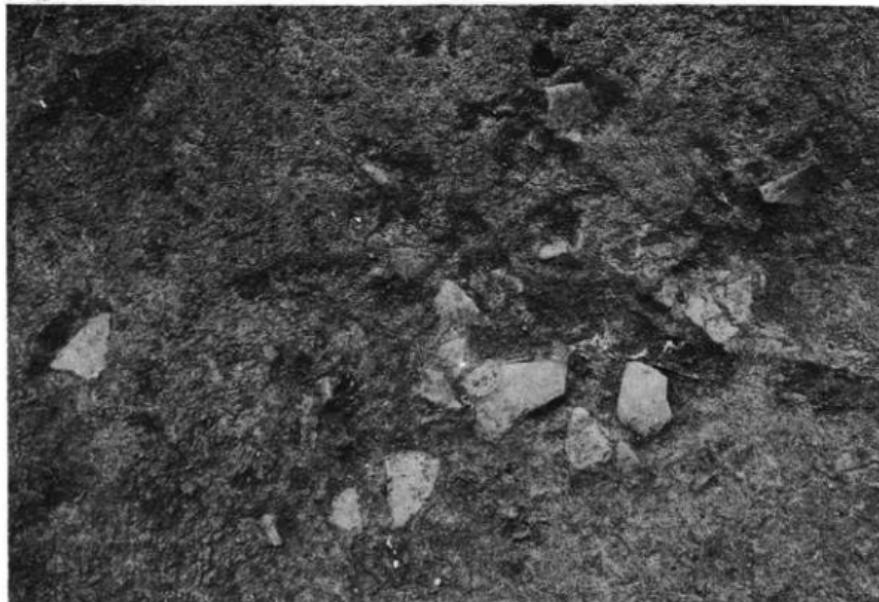


1 4号墳主体部鉄鎌出土状況（北より）



2 4号墳主体部（北東より）

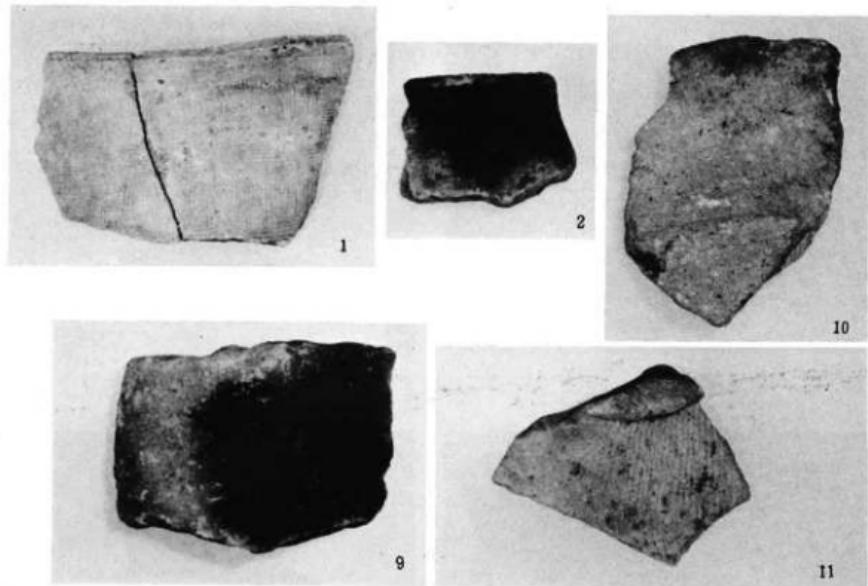
図版 X



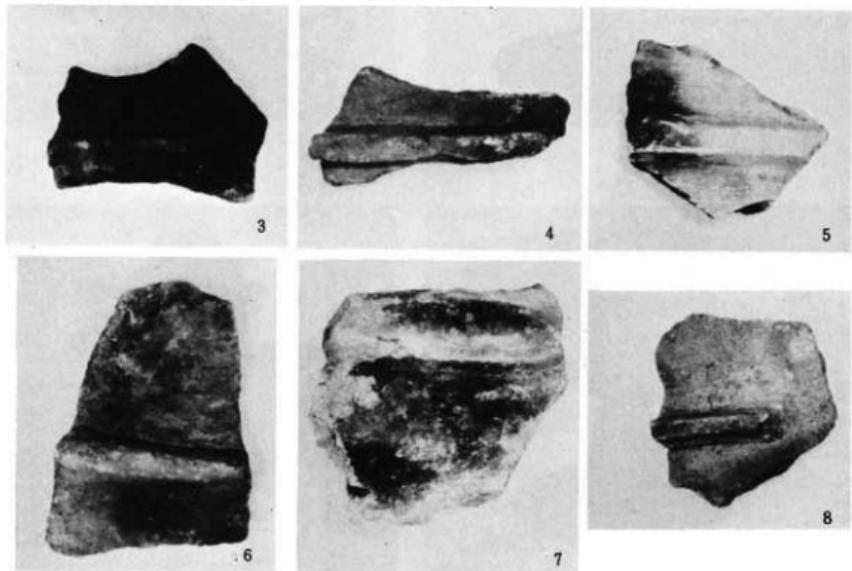
1 4号墳溝土師器高坏出土状況（北西より）



2 5号墳溝土師器高坏出土状況（東より）



1 3号墳出土埴輪口縁部・端部



2 3号墳出土埴輪胸部

図版 XII



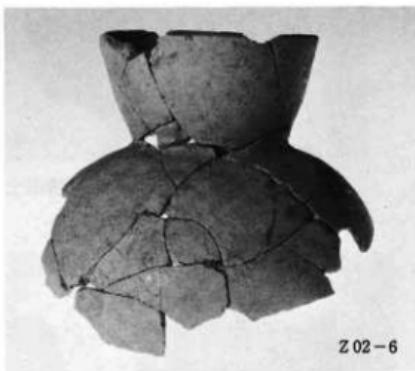
Z02-1



Z02-4



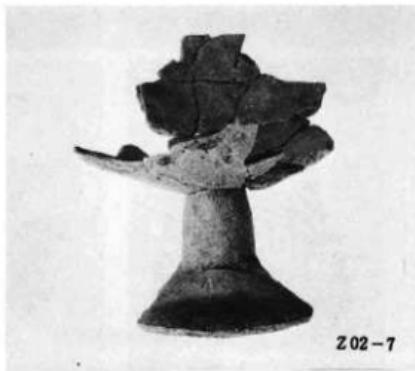
Z02-2



Z02-6

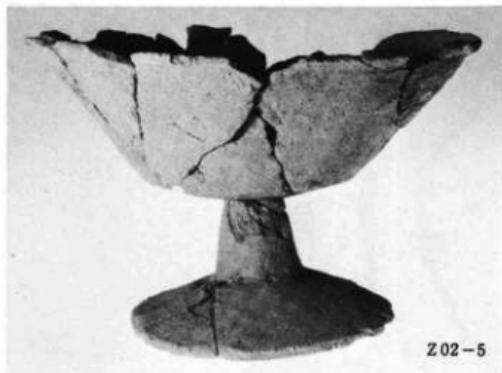


Z02-3



Z02-7

2号墳出土土師器



Z02-5



Z03-2



Z03-1



Z05-3

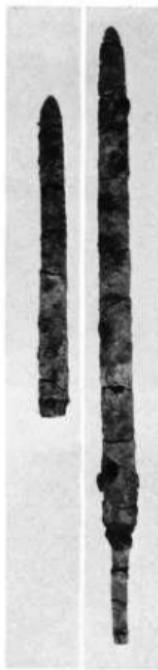
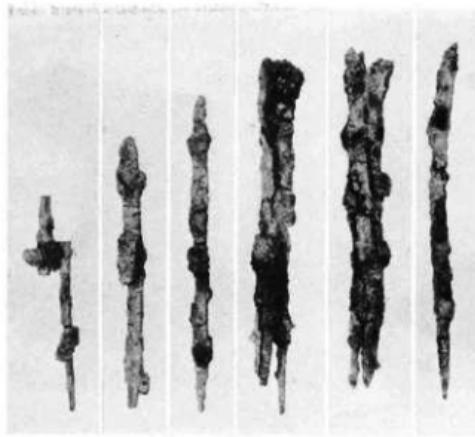
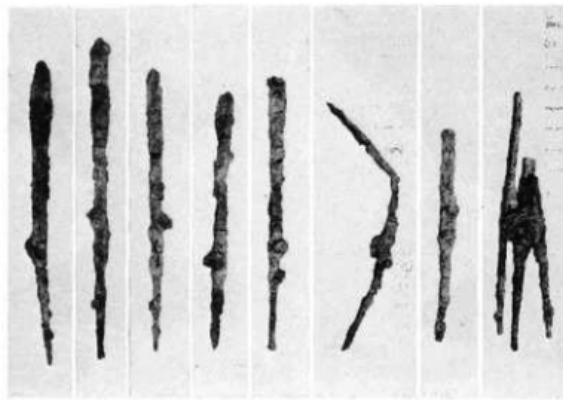


Z05-1

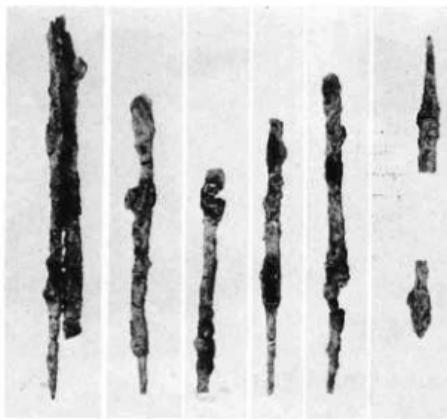


Z05-4

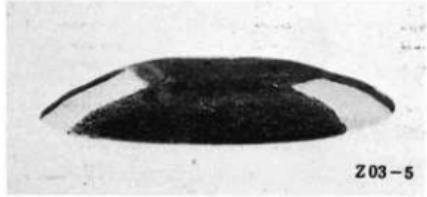
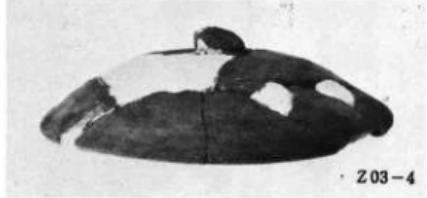
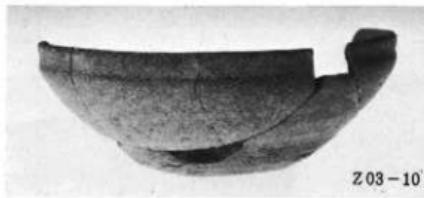
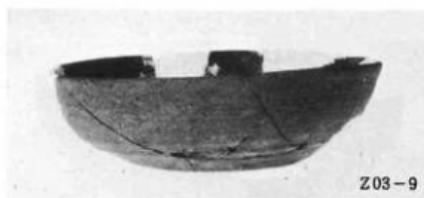
2・3・5号出土土器



3号墳鉄劍



4号墳鉄鎌



図版 XVI



Z03-14



Z03-23



Z03-15



Z03-20



Z03-24



Z03-22

3号墳出土須恵器

昭和56年3月15日印刷  
昭和56年3月25日発行

昭和55年度  
宝満山地区県営公害防除特別土地改良事業に伴う  
**増福寺古墳群発掘調査報告書**

編集者 宮本徳昭  
発行 八雲村教育委員会  
印刷 報光社